新刊紹介

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集部が選択して紹介いたします。

『〈科学ブーム〉の構造 ―科学技術が神話を生みだすとき―』

五島綾子 著｜みすず書房 2014年、288pp.

科学技術にはブームがある。何らかの契機によって、ある科学技術に対する社会的関心が急激に高まり、その研究への投資や関連商品の開発が煽られることがある。日本でも、マイナスイオンや海洋深層水などの科学ブームがまだ記憶に新しいだろう。科学者、政策立案者、産業界、マスコミなどの思惑が絡み合い、科学ブームは引き起こされる。ブームの渦中では、その科学技術が描く未来に対する社会の期待は膨らみ続け、時に巨額の税金が研究費として配分され、また時に科学的根拠の判然としない商品が市場に次々と投入される。しかし、ブームである以上はいつか終焉を迎えることになる。

本書は、1950年代から60年代の殺虫剤DDTのブームと、1990年代から21世紀初頭のナノテクノロジーブームを取り上げ、詳細な資料の分析と関係者へのインタビューから科学ブームの構造について検討している。第二次世界大戦中のアメリカで前線の兵士を感染症から守るために導入されたDDTは、戦後、大規模化する農業を支える農薬として大きなブームを迎える。しかしこのブームは、DDTの持つ生態系への負の影響が表面化し始めたことで転機を迎える。ブームの崩壊を決定づけたのがレイチェル・カーソンの『沈黙の春』であった。

ナノテクノロジーは、アメリカでクリントン政権下の2000年に国家レベルの科学技術政策として打ち出されて以降、世界各国に科学ブームとして波及していった。ナノテクノロジーに対する社会の期待は高まっていったが、その期待に応える成果がなかなか生み出せず、ブームは数年で沈静化する。DDTと同様に、環境や健康に対する負の側面（ナノリスク）が取り沙汰されるようになったこともブームの沈静化に影響した。

著者は、こうした科学ブームを支えるのは「神話」であると指摘する。未来の科学技術への莫大な投資を引き出すためには、その成果に関する誇大な宣伝が必要となる。不確実な未来への投資を正当化するために、この二つの科学ブームの当事者たちはどのような神話を語ったのか。詳細については本書を手に取っていただきたいが、いずれの科学技術もこの神話の崩壊がブーム終息へと向かう重要な契機となった。

こうしたブームは実に空虚である。多くの人々の努力や多額の税金が空費され、ブームが過ぎ去った後に何が残るのか。本書で指摘されている通り、ブーム終息後の現在も、ナノテクノロジー研究はもちろんのこと、DDTのリスク研究も途絶えることなく進められている。科学技術が光と影の両面を併せ持ち、不確実性を内包するものである以上、こうした地道で長期的な研究努力が必要不可欠であることは言うまでもない。本書は、科学技術の本質をブームという現象から浮き彫りにし、社会に向けて科学技術研究の在り様を問う書籍である。

評／『彦根論叢』編集委員／ 竹中厚雄

『錯覚の科学』

クリストファー・チャブリス、ダニエル・シモンズ 著
木村博江 訳｜文春文庫 2014、445pp.

「自分は携帯で通話しながらでもきちんと運転できるのにどうして取り締まられなくてはならないのか」と思っている人は意外と多いかもしれないが、それが飲酒運転に匹敵するほど危険な行為であることは、本書を読むとよく分かる。人間は自分では十分にできている・理解していると思っていても意外とできていなかったり理解できていなかったりするものだ。そのような錯覚や思い込みは、時に大事故につながることになる。本書は、えひめ丸の沈没事故やリーマンショックを招いた投資家の誤算など多くの具体例を挙げて、なぜ人は事実とは異なることを「記憶」してしまったり、あるいは冷静に考えれば間違っているとすぐ分かる妄言を安易に信じてしまったりするのかを心理学・脳科学の観点から分かりやすく説明している。特に、筆者たちが行った「バスケットボールのパス」実験は興味深い。実際に、本書に載っているURLから、ネット上で読者もその実験を行うことができるので、興味のある人は試してみるとよいだろう。「見える」はずのものが見えなかった、という体験ができるかもしれない。

実際の人間は超合理的でも超利己的でも超自制的でもない。「人はどのように間違いやすいのか」を知っておくことは、実生活でもかなり役に立つと思われる。

評／『彦根論叢』編集委員／ 出原健一

『日・韓・中　トンデモ本の世界』

と学会 他著｜サイゾー 2014、229pp.

と学会の「トンデモ本の世界」シリーズの最新刊。トンデモ本とは、（と学会の定義とは少々異なるが）「とんでもない論を展開している本」、つまり科学的方法論に則らずに自説を展開している本と言ってもよいだろう。この種の本の多くが、心理学で言う確証バイアス（自分の主張にとって都合の良い「証拠」ばかり集めて、都合の悪い証拠は無視してしまうという錯誤）に陥っているが、近年「ヘイトスピーチ」という言葉をよく見かけるようになったことを受けてか、今回は「日本・韓国・中国」論に関連する「トンデモ本」を取り上げ論評している。ヘイトスピーチも、（そもそも「証拠」自体が事実無根であることも多いが）、相手の長所は無視し、欠点ばかりをあげつらうという点で、まさに確証バイアスに陥っている（または意図的に利用している）わけだが、実際、本書でも様々な「トンデモ本」を評して、「否定的な部分のみを集めて書かれたという点にも十分留意する必要がある」（p.18）や「都合のいい部分だけチョイスして肝心な所には一切触れない」（p.21）といった記述がよく出てくる。反証を無視すれば、どんな荒唐無稽な論でも「立証」することが（一見）できてしまうということが本書を含め、このシリーズを読むとよく分かる。

書物に書かれていることやメディアで報道されていることがすべて正しいわけではない。「その主張に当てはまらない事例はないか」ということに気を留めておくだけでも、トンデモ説に引っかかることは大分減るだろう。

評／『彦根論叢』編集委員／ 出原健一